

茨城県立歴史館令和4年度春の特別展「鹿島と香取」開催要項

- 1 展示の名称 茨城県立歴史館令和4年度春の特別展「鹿島と香取」
- 2 主 催 茨城県立歴史館
- 3 特別協力 鹿島神宮、香取神宮、千葉県立関宿城博物館
- 4 協 賛 未定
- 5 後 援 茨城県鹿行地域、千葉県香取地域の市町村を中心とした自治体を予定
- 6 開催場所 当館1階 第3・4展示室
(文化財保護法第53条に基づく公開承認施設 第4-6号)
〒310-0034 水戸市緑町2-1-15
- 7 会 期 I期：令和5年2月17日(金)～3月21日(火・祝)
開催日数 33日、開館日数 28日
II期：令和5年4月8日(土)～5月7日(日)
開催日数 30日、開館日数 26日
※月曜休館(祝日の場合はその翌日)
- 8 入館料
◎一般 610円(490円) 満70歳以上 300円(240円) 大学生 320円(240円)
()内は20名以上の団体料金
◎小・中・高校生・未就学児は無料
◎身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・指定難病特定医療費受給者証をお持ちの方と
付き添いの方1名は無料

9 開催趣旨

茨城県の南東部に広がる水郷地域は、中世以前には「常総の内海」と汎称される内海の一部により、近世以降には利根川により、常陸国と下総国、あるいは茨城県と千葉県に分かれていました。

しかし、国や県を異にしながらも、この地域は内海・利根川の沿岸社会としてひとつの文化的空間を形成していました。このまとまりの要とも言える鹿島神宮・香取神宮は、『延喜式』記載の神社において伊勢神宮とともに「神宮」と称された二社であり、古代より貴族や武家、海夫などの広い崇敬を集めてきました。また、近世においては息栖神社を含めた東国三社詣の舞台となり、時には安政の大地震後の世相を反映した鯰絵のモチーフになるなど、都市部との流通や文化にも大きな影響を及ぼしました。

令和3年には、古代の鹿島について多くを記す『常陸国風土記』の成立から1300年を迎えたほか、令和8年には鹿島神宮と香取神宮の緊密な関係性を示す12年に一度の御船祭・神幸祭が令和改元後に初めて執り行われることとなっており、当地域への注目が高まりつつあります。

本展では、両神宮に伝来する貴重な社宝を展示するとともに、内海ないし利根川沿岸社会の文化的諸相について、古代から現代に至る長期的時間軸の上に考古・民俗・美術工芸・歴史の様々な視点から探り、この

地域の歴史的魅力に迫っていきます。

10 展示構成（案）

第一章 鹿島神宮と香取神宮

鹿島神宮、香取神宮は、ともに古代において神宮と称され、また内海を挟み近在したことから、様々な共通性が見られます。本章では、両神宮の国宝をはじめとした社宝から、各々の類似性を探っていきます。また、現代まで続く両神宮の緊密性を示す十二年に一度の御船祭・神幸祭を取り上げ、次回開催される令和8年に向けての紹介を行います。

第二章 利根川の水運

関東平野を流れる利根川は、中世まで現在の東京湾へと流れていましたが、17世紀になるとその下流が太平洋へと移され、それと共に利根川の水運を利用した人的・物的移動が盛んになりました。本章では、この舟運による東国三社詣や商品の輸送の様子を、旅日記や神社に奉納された絵馬等とともに紹介していきます。

第三章 鹿島・香取地域の文化

鹿島と香取は、古代から現代に至るまで、行政区分を隔てながらも、一つの文化的空間を形成してきました。本章では、鹿島・香取地域の特徴を反映した古墳出土資料や板碑などの石造物、両神宮における神仏習合の様相が見られる仏教美術、鹿島の武甕槌神を主要モチーフとした鯰絵、現代における鹿島開発について記した行政文書などから、当地域に展開した文化の諸相を探っていきます。

11 主要出陳資料（予定）

・直刀・黒漆平文太刀拵	茨城・鹿島神宮	国宝
・海獣葡萄経（複製）	千葉・香取神宮	原品：国宝
・陶製狛犬	茨城・鹿島神宮	茨城県指定
・陶製狛犬	千葉・香取神宮	国重文
・御船木	茨城・鹿島神宮	
・御船木	千葉・香取神宮	
・利根川図志	当館	
・懸仏	千葉・観福寺	国重文
・神宮寺経塚出土資料	当館	
・鯰絵	個人	